

円筒印章と考古学

小野山 節

1 新印影による円筒印章の研究に欠けるもの

円筒印章 Cylinder Seal, cylindre, Rollsiegel は、南部メソポタミアすなわちバビロニアにおいて紀元前4千年紀のウルク後期にシュメール人によって発明され、ウルク期末からジャムダト・ナスル期にかけて西アジア一帯に拡がった。ジャムダト・ナスル期末から初期王朝期にかけて、バビロニアに侵入してきたアッカド人も、シュメール人とともに新しい図文を採用し、また楔形文字を加えるなどして多くの円筒印章をつくった。紀元前1600年頃、バビロニアを侵略したカッシュ人もその伝統を継承し、アカイメネス朝ペルシアまで続いた。

紀元前331年から翌年にかけてのアレクサンドロス大王によるバビロン、スサ、ベルセポリスの占領は、ペルシア帝国を崩壊させ、円筒印章もこれをきっかけにして姿を消した。以後ギリシア彫玉の形態と図文が西アジア一帯に支配的となったのである。したがって、ヨーロッパ人にとって古代メソポタミアがかれらの研究領域にはいつてきたとき、およそ3000年間継続して製作、使用されてきた円筒印章をその古代文明の特徴的な遺物の一つと見做して注目したとしても不思議ではない。

ヨーロッパの研究者の関心は、はじめ美術品とそれを生み出した宗教に向けられたので、その図文に神々や怪獣がみられる円筒印章は、研究対象として格好の材料であった。博物館では円筒印章の収集が進められ、次々と目録類が刊行されるようになった。このような研究の方向における代表的な著作として、2冊の書物を挙げるができる。

H. Frankfort, *Cylinder Seals : a Documentary Essay on the Art and Religion of the Ancient Near East*. Lodon, 1939.

Anton Moortgat, *Vorderasiatische Rollsiegel : ein Beitrag zur Geschichte der Steinschneidekunst*. Berlin, 1940.

これらの書物は、出版いご円筒印章の研究ならびに収集品目録の作製に指導的な役割を果たした。とくに Frankfort の *Cylinder Seals* は、それまで年代的な証拠の不明確であった初期王朝期の円筒印章にたいして、かれが発掘したディヤラ地域の層位的発掘の研究成果を根拠とした編年を与えているために、優れた編年の枠組としても有効性をかねそなえていた。1955年には多くの研究者が待望していたディヤラ地域発掘の円筒印章にかんする報告書 H. Frankfort, *Stratified Cylinder Seals from the Diyala Region, Oriental Institute Publications*, Vol. 72, Chicago, 1955 が出版された。それは従来の報告書や目録類と同じく、新印影を主体とするもので、個々の円筒印章の形態、すなわち考古学的研究の資料として見たとき最も重要な要素の一つである形態が著しく軽じられているという印象をもったけれども、実物を見る機会に恵まれなかった筆者にとっては、円筒印章の形というのはあまりにも単純なので、そのような取扱いしか受けられないかも知れないと推測するより外なかった。

ところが、1981年文部省の在外研究員として英国に滞在中、オックスフォード大学のアシュモール博物館と大英博物館¹⁾で、円筒印章を手にとって観察し、実測する機会が与えられたとき、円筒印章は図文ばかりでなくその形態からも、印章のもつ意義を明確にする方向を含めて、人間活動にかんする多くの情報がえられることが分った。短期間の滞在中で実測することができた印章の数は少なかったけれども、円筒印章研究の最近の動向と関連させながら、気付いた重要な点を以下に記して、問題を提起しておきたい。筆者は Assyriologist ではないので、考古学の一研究者として円筒印章を見たとき、どのようなアプローチが可能であるかということの素描である²⁾。

なお、小論において新しい用語を使うのであらかじめことわっておきたい。それは印影と新印影と印泥の関係である。Seal impression または単に impression の訳語として印影が一般に用いられているが、この語で示すものには明らかに異なる二種類が含まれている。一つは本来の機能にしたがって封印のために粘土塊やタブレットに回し捺されたものであり、第二は研究や展示のために、本来の機能から離れて粘土板やワックスに回し捺し

1) Ashmolean Museum では Department of Antiquities の Keeper H. J. Case 氏, Senior Assistant Keeper, P.R.S. Moorey 博士, および Helene Whitehouse 博士に, British Museum では Department of Western Asiatic Antiquities の Dominique Collon 博士に大変お世話になった。感謝の意を表したい。

2) 小論は1983年7月30日広島大学で開催された第16回シュメール研究会において「円筒印章の研究に何が欠けているか」と題して発表したものである。ただし若干の部分が省略されている。なお挿図の作製について清水芳裕・岡村秀典両氏のお世話になった。

れたものである。前者だけを印影とよび、後者を新印影と使い分ける。Briggs Buchanan が *Early Near Eastern Seals in the Yale Babylonian Collection* (1981) において new impression という表現を使っているけれども、これは1934年に出版された H.H. von der Osten による *Ancient Oriental Seals in the Collection of Mrs. Edward T. Newell* (Chicago) で用いられた impression に対して、新しい impression を作製したという意味であって、小論で使う新印影とは異なる。小論の用語法では1934年の impression も1981年の new impression も双方ともに新印影ということになる。そして封印の役目をおえて破棄された印影をもつ粘土塊を印泥という。

2 円筒印章の機能の解明をめざして

新しい観点から円筒印章を研究しようとする動きが10年ほど前から明確になってきた。その成果の一つが Edited by McGuire Gibson and Robert D. Biggs, *Seals and Sealing in the Ancient Near East. Bibliotheca Mesopotamica* Vol. 6, Malibu, 1977. である。これは1975年にシカゴの Oriental Institute で開催されたシンポジウムの報告で「まえがき」を Robert McC. Adams, 「序論」を編者2人が書き、14編の論文を収め Gibson が「総括」を行っている。シンポジウムで発表したけれども、3人は論文を別に刊行したためこれに掲載せず、また1編は報告編集にさいして加えられたものとのことである。

Gibson の「序論」によると、印章の機能にかんするシンポジウムの発想が生れたのは、1974年7月にローマで開かれたアッシリア学会の折に、かれと Edith Porada, Hans J. Nissen があるディスカッションをしていたときであったという。また Adams の「まえがき」は本文が集められた段階で書かれたものであるから、このシンポジウムの目標を理解する上で重要なのは、発案者であり、編者の1人でもある Gibson が Biggs とともに書いた「序論」であろう。それは次のようなパラグラフで始まっている [GIBSON and BIGGS 1977 : 3]。

スタンプおよび円筒印章にかんする多くの出版物があり、彫石研究の分野は盛んである。しかし、印章のほとんどの研究は様式的か図像学的である。それらは様式と主題にみられる時間的、空間的な変化、あるいは彫石家の違いさえ扱う。古代世界における印章の機能や捺印のやり方はほとんど明らかにされなかった。ごく2、3年前に、タブレットに捺した印章に対して多くの注意が払われたが、その時でも、その注意は他から促されたもので、目的は、年を印したタブレットにおける印影の存在によって特殊な様式や要素の出現期に年代を与えることにあった。印章が管理行政機構のなか

で、また法による処理などにおいて使用されたことは明らかであったが、機能の全域と時代による機能の変化は体系的に研究されることがなかった。

この通りだと思う。

それではシンポジウムののちに何が明らかにされただろうか。「総括」において Gibson が個々の論文にコメントをつけた後、今後の研究の進め方への注意を述べた箇所では次の点を強調している [GIBSON and BIGGS 1977 : 151—152]。抜書きすると次のような主張である。

西アジアにおける文献資料の研究と考古学的研究は、1世紀以上にわたって進められてきたが、文献学者と考古学者の間には溝があった。とくにメソポタミアでは文献資料が、他の遺物とともに発見された一群の遺物のなかの一部としてよりも切離されてむしろ辞書とか法律とか文学として、その大部分が考察された。遺物間の諸関係を無視することは、文献学者の欠点であるばかりでなく、考古学者の欠点でもある。両者のコミュニケーションが欠けていることによって、タブレットに捺された印影が、現在でもテキストの編纂においてしばしば無視されている。印章の銘文の部分だけが問題にされるか、印影があることの注意が記されるにしても、図も写真もそえられない。同じくタブレットにある印影の図像学的研究は印影の写真や図を提供するであろうが、図文の導入時期を問題にすることのできる年代を除いて、考古学者はタブレットの内容を知らない。ここに収められた論文をとおして、考古学者と文献学者が互いに共同作業の必要性を認識してくれるならば、この書物は重要な役割を果たしたことになる。

われわれは以上のような「総括」の主旨から、1975年にシカゴで開かれたこのシンポジウムが、最近の研究の総括というよりもむしろ今後の研究の方向づけという点で意義があったものと認めることができる。しかしここで上の内容と関連する2点について注意しておきたい。

(1) Gibson の「総括」のなかで強く求められている文献学者と考古学者の協力という点でいえば、シカゴの Oriental Institute から派遣したイラクのディヤラ地域の発掘調査において Henri Frankfort 等の考古学者と文献学者 Thorkild Jacobsen の間に見られた良好な協力関係の先例があるにも拘らず、Oriental Institute においてそのあり方を持続させ、さらに緊密なものにすることが何故できなかったかを、Gibson をはじめとする Oriental Institute の関係者はまず反省すべきであろう。

(2) タブレットの印影については、ここに指摘されている通り、タブレットの楔形文字資料集には、印影があってもその存在を文字で指示しただけで、なかにはそのことす

ら注意していないものも多い欠陥資料集が大多数なので、これらの論文の筆者たちは、例えば、Piotr Steinkeller のように [1977: 41—53] 優れた着想を示しながらも、時代を限定したものにとどまり、バビロニア全般についての考察にまでそれを展開するには至っていない。

ところで、印影の総合的研究は、実はさかのぼるとこのシンポジウムの十数年前にすでに計画され、実際に行われた。I.I.Gelb が1961年春に、シカゴ大学の Oriental Institute において、文献学者と考古学者数人の共同研究としてメソポタミア印章学 Mesopotamian Sigillography の研究セミナーを組織したもので、目的とするところは、さまざまな面において印章学を議論することであったが、次の3つに重点があったという [GELB 1977: 107]。

- 1) typological organization of all materials, inscriptional and iconographic
- 2) relation of the seal inscription to the seal iconography
- 3) relation of the seal inscription to the tablet.

そして Gelb 自身の分担が “Typology of Seal Inscriptions” であった。その研究成果として作製した Chart of Typology of Seal Inscriptions が改訂されてこのシンポジウム報告集に掲載されている [GELB 1977: 115—126]。このセミナーの目標は全部が示されているわけではないが、銘文と図像の検討およびタブレットとの関係に重点があって、考古学的な検討は軽視あるいは無視されていたのではないかと推測される。

しかしながら、印章の総合的研究への新しい動きは1961年に Gelb によって先鞭をつけられ、1975年の Gibson 等によるシンポジウムへと、シカゴの Orient Institute を中心に進められてきたと認めて良いだろう。このシカゴ大学 Orient Institute の Adams はシンポジウムの編者に求められて、「まえがき」のなかで大要次のように述べている [GIBSON and BIGGS 1977: 1—2]。

これらの論文のテーマはさまざまだけれども、円筒印章研究の転換点をいずれも示している点で一致する。これらの研究は、Frankfort が到達した伝統的な研究の編年の枠組によって行なわれているが、この報告で問題になっているテーマ、すなわち、印章の銘文、製作技法の問題、原材料の調達、さらに印章の象徴的あるいは経済的機能でさえも、かつては “付随的な問題” として非常に限定された取扱いを受けていたものである。Frankfort が行った先駆的な仕事の方向—編年を主体とした彫石美術的研究—の重要性と有効性は変らない。ただ細部において、Pierre Amiet がいうように、新しく分ってきた地域性をもつパターンが明らかになると、Frankfort の編年は修正されつづけるで

あろう。一方、新しい研究の方向に2つの傾向がありうるように思われる。1つは製作、所有、使用のパターンを特定することによって印章または印影の仲間を詮索するものであり、第2は印章のグループがある時代に使用された制度的な背景を確立しようとする、前者よりもさらに諸事象との関係のなかで理解していこうとする方向である。この2つの方向は、実際には関連があり、本質的には相互補完的なものである。これらの研究で獲得されたものは、印章の研究が古代の歴史と社会の重要な諸相の理解に粉れもなく役立つという意識である。忘れられてはならないが、一時的に保留されるべきものは、彫石美術にテーマを限ることやメソポタミア文明の産みだしたもののなかで印章に永続的な位置を固定するような研究初期のあり方であると。

しかし、これで良いのだろうか。印章の研究で最も遅れているのは、古代メソポタミアの研究者が、印章とくに円筒印章を考古学的研究の資料である遺物として正当に取扱っていないことによる、と筆者は考える。基本的な観察と、正確な図による特徴の表現と、文章によるその記述が欠落していることが円筒印章の研究を立遅れたものとしているように思う。以下に若干の例を示そう。

3 彫石具として円板カッターが使われたか？

Hans J. Nissen は上述のシンポジウムにおいて、初期円筒印章の発達の様相を、1) 円筒印章の起源、2) 彫石の道具、3) 初期円筒印章における機能差の3点について問題にした〔NISSEN 1977: 15—23〕。そのうち彫石の道具の考察において、円板カッターの存在を想定していることを問題にしたい。

円筒印章の文様を構成する線を検討して、それに残る特徴から推測してゆくのであるが、論述はあまり論理的に進められていないので少し単純化すると、次のようになる。文様を構成する線には直線と曲線とがあり、線の溝は円板カッターの刃の断面形によって丸味を帯びたものと三角状を呈するものがあり、円板の直径が円筒印章のそれより大きいときには、それぞれの線の両端の先細りは長くなるけれども、逆に円筒印章の直径より円板の直径が小さいときには、線の両端にみられる先細りは短くなるという〔NISSEN 1977: 16—18〕。

そして4種類の円板カッターを推測し(図1, 1・2)、西アジアの現在のバザールで見られる弓を使った錐と同じ原理で、この円板カッターにも回転が与えられたと推測して、その道具を復原図示している〔NISSEN 1977: 7〕。ただし、円筒印章の彫石道具として、円板カッターを考えたのは、Nissen も述べているように〔NISSEN 1977: 22, n, 10〕、

かれが最初ではない。しかし Frankfort が円板カッターによる彫石を認めたのはカッシュ時代以降の円筒印章であって [FRANKFORT 1939 : 5], このこと自体についても再

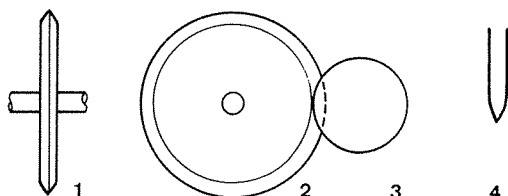


図1 Nissen が想定した cutting wheel 4 種のうちの1つ。図2の魚文加工に使用した形態と推測されている [1977 : Fig.2左上]

検討を必要とするが、この道具が初期における円筒印章の文様の彫刻にも用いられたと考えたのは Nissen がはじめてである。

Nissen は、ウルク後期から初期王朝 I 期までの円筒印章 9 例について、その検討の結果を表示しているが、指示されている出版物にあたってみた限りでは納得できないものが多い。この種の問題は実物を見たくて議論することが重要なので、筆者が実際に見て実測することのできた 1 個について詳しく検討してみたい。

それは図 2 の円筒印章で、白い斑点をもつ桃色大理石製、頂部から約 1/4 の深さまで穿孔し、底部に浅い小孔を穿つ。頂部に別作りのつまみをつけた痕跡を示す長方形区画が認められる (図 2)。高さ 27.9mm、やや中ぶくらみで、直径は上下それぞれ 22.4mm、中央で 23.0mm。1928 年にジャムダト・ナスルから出土したものである。6 匹の魚を 2 列に並べ、2 箇所に縦溝を入れてある [BUCHANAN 1966 : No. 49³⁾]。

Nissen の表によると、図文の線は直線で、その溝の面は三角状、線の両端は先細りの長いものと記述され、ウルク後期の年代が与えられている [NISSEN 1977 : 18]。この魚文の円筒印章がウルク後期に属するか、ジャムダト・ナスル期に属するかは、ハブバ・カピラ [STROMMINGER 1980] やスサ [LE BRUN 1971 : 177, fig. 43 : 10, Pl. xxii : 4] における最近の発掘成果と関連するため詳細な検討を必要とする重要な問題であるので、別の機会に議論することにして、ここでは図文の線だけを問題にする。図 2 の 3 の断面図から明らかなように、線の断面は Nissen のいう通り三角状を呈するが、魚文の横の断面図は (図 2, 4)、尾鰭を含まない体だけのものだけれども、3 匹ともほぼ中央で外側に屈曲している。この事実は魚文の体を表す線が図 1 の 1 と 2 のような円

3) Pl.4, No. 49 の写真は天地逆である。目録の記述と違う点は筆者の観察による。

板カッターで刻まれたものでないことを確実に示すものである。円板カッターであれば、内側に向って弧状をなす筈である。2回に分けて刻みを入れたと考えるにしても、断面

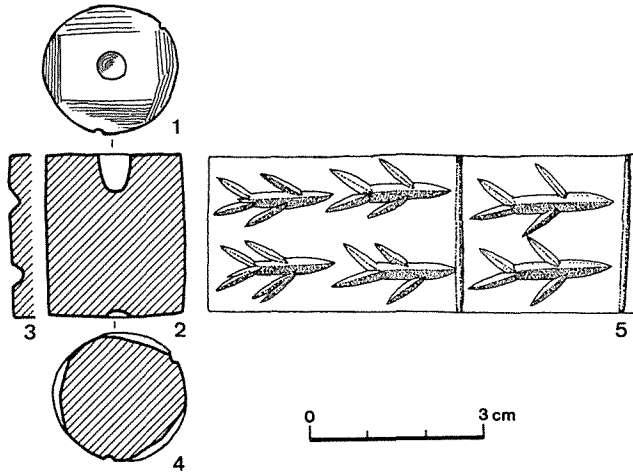


図2 ジャムダ・ナスル出土の円筒印章. 5は新印影の図. アシュモレー博物館蔵.

By Courtesy of the Visitors of the Ashmolean Museum.

にみられる線の底は小弧を2つ合せた形にはなっていない。

何故このような誤認をしたらろうか。筆者の推測にすぎないけれども、粘土上に回し擦りされて現われた新印影の魚体の形から速断したことに原因があるのではないかと思う。すなわち図文の彫刻はネガであるのに、新印影から図文を判断する習慣になれてしまって、ポジのままに誤判したと推測する。要するに問題の円筒印章を正確に観察していないのである。筆者の検討することができたのは1例にすぎないが、他の8例についても、果して Nissen の記述が妥当かどうか疑問を懐かざるをえない。

4 円筒印章の形態

考古学では、研究の資料とする遺物の形がどのようなものであるかを出発点とする。以下の3点は、アシュモレー博物館と大英博物館で1981年に円筒印章を実測する過程で気付いたことから抜き書きしたものである。現在知られている円筒印章の総数からいえば、恐らく、文字通り九牛の一毛にすぎないであろう70余個の実測なので、ここに記す内容はごく初歩的な考察である。したがって円筒印章を見る機会を持たれた方は、以下に挙げる点にも注意していただきたいという要望である。

(1) 円筒印章の携帯 図3の1はアレppoの北Azazという村で出土したと伝えられ

る白大理石の大型印章である [BUCHANAN 1966 : No. 22]。神殿と4頭の羚羊などの図文をもち、ジャムダト・ナスル期と認められている。上下両面から穿孔し、少しずつ

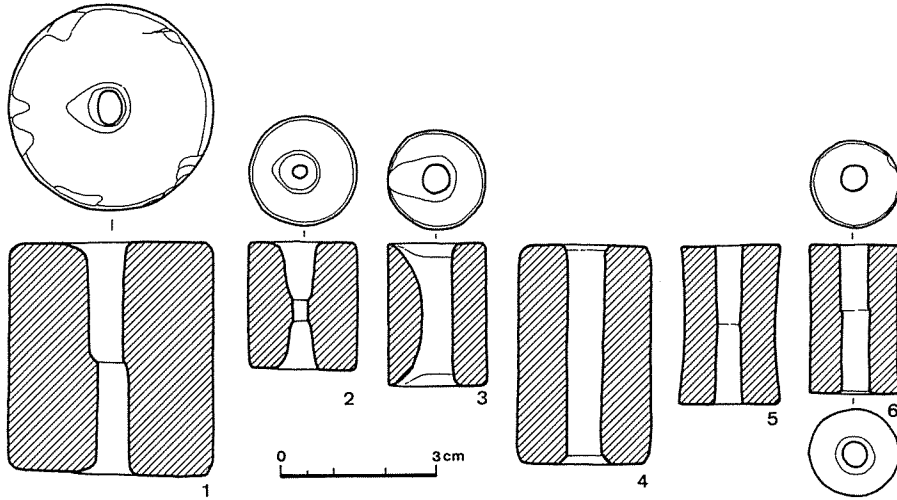


図3 円筒印章. 4の大英博物館蔵のほかはアシュモール博物館蔵.

By Courtesy of the Visitors of the Ashmolean Museum.

いる。孔の左に上下とも同じ方向に三角状に磨滅した跡が認められる。これは紐ずれの痕跡である。図3の2はジャムダト・ナスル出土の白大理石製、注口付壺6個を2段に配列した図文をもち、上下から円錐状に穿孔して中央を狭い孔でつないでいる [BUCHANAN 1966 : No. 46]。これにも上下両面ともに同じ方向の紐ずれの跡が認められる。図3の3は出土地不明、褐色がかった黒縞のある白大理石、魚のようなもの9匹を3段に並べていて、図文からみて、ジャムダト・ナスル期 [BUCHANAN 1966 : No. 51]。孔の上下の同じ方向に著しい紐ずれの跡が認められる。

このような紐ずれのあり方は、円筒印章を身につけたとき、それは水平に保持されていて、しかも2個以上ではなく必ず1個を紐に通して携帯したことを示している。

さらによく観察すると、図3の3は紐ずれが外周にもわずかに認められる。図3の1では上部の紐ずれに対応する外周部にも同様な紐ずれによる磨滅の痕跡が認められる。残念なことに、この点に対応する下面外周部に損傷があって明確でないが、下面外周部にもあったとすると、円筒印章に通した紐をかける対象は、図3の1の高さより大きなものではなかった。少くとも頸にかけたということはほとんどなかったのではないかという推測も可能になる。ただし、最後の点はさらに多くの例に当ててみる必要がある。

前項で問題にした円筒印章は、上面に鈕をつけてループでつるすのであるから、円筒形を縦に下げることになる。鈕を小牛や牡羊形に象った例もあるので〔FRANKFORT 1939 : Pl. Ib, MOORTGAT 1940 : Tf.5〕, ウルク期からジャムダト・ナスル期にかけては、円筒印章を横にさげるものと縦にさげるものとの二種類の携帯法があったことになる。この違いが何を意味するかは今後の課題であるが、初期王朝Ⅲ期以後は、縦方向に統一されたらしい。使用による磨滅の跡がかなり著しいものでも、穿孔の一方方向がとくに磨滅した例はみられなくなる。

図3の4は大理石製で、ライオンが野生羊を襲う図、牡牛をライオンが襲う図、牝ライオンをつかみ剣をもつ裸の英雄の図などが表現されている初期王朝Ⅲ期の印章である〔WISEMAN 1962 : Pl. 16 a〕。穿孔の上縁よりも、下縁の磨滅が著しく、しかも磨滅のかたよりは認められない。このことは、この円筒印章がたえず縦にさげられていたことを示している。

図3の5は灰色砂岩、縦に剝離して一部が欠けているが、側面をくぼませてあり、手桶をもつ女神、子山羊をつれた崇拜者、龍上に座す神を表わしたアッカド時代の印章で、キシュから出土したものである〔BUCHANAN 1966 : No. 336〕。これは使用による磨滅の跡が非常に少ない例であるが、穿孔の上縁部より下縁部がよりいっそう磨滅している。図3の6は蛇紋岩製で、有翼竜と闘う2人の英雄を表現し、楔形文字で、「Urbada (?), 書記, Ur-Bau の息子, Shulgi の神殿高級行政官⁴⁾」と書かれている、ウル第三王朝時代の円筒印章である〔BUCHANAN 1966 : No. 417〕。磨滅の跡はほとんど認められないけれども、下縁には穿孔よりやや大きい浅い凹みができている。おそらく紐の先に座金のようなものを備えていたのではないかと推測される。縦にさげることを容易にするための工夫であろう。

(2) 凹形円筒印章 円筒印章は字義通り円筒形のものが多いが、側面がくぼんだものもかなり存在する。当然このことは早くから注意されていて、目録類には convex と注記されており、Frankfort もジャムダト・ナスル期にはかなり強度の凹形が、アッカド時代には図3の5のようなわずかな凹形の円筒印章が存在することに注目しているけれども〔FRANKFORT 1939 : 7, 8〕, 凹形円筒印章が製作された背景などについては何も分っていない。まず目録類に実測図をそえ、統計的处理によって、凹形円筒印章の全般的な傾向を正確に把握する必要があるのではないだろうか。

4) 山本茂, 大江節子両氏の御教示をえた。

印章の図文について、その全面を明瞭に捺してあることを求められた時代のうち、これを手早く実現する方法を工夫したのが、ジャムダト・ナスル期やアッカド時代ではなかったかというのが、筆者の思いつきである。P. Steinkeller がシカゴのシンポジウムで指摘した行政タブレットに印章を捺した時代とそうでない時代があるという事実と恐らく関係があると考え [1977: 41]。ただしジャムダト・ナスル出土のタブレットには、印影が捺されている例が多いけれども、同遺跡から出土した円筒印章の図文も、さらにそれと同種の図文も、それらの印影のなかからは発見することができないという問題がある。木製円筒印章の存在を想定することが可能なのではないかと思うが、この問題は別の機会に論じたい。

(3) 銘文を刻み直した(?) 円筒印章 図3の6の円筒印章は(1)で説明したが、上述のことの外にも注目すべき点がある。それは穿孔が中心にないということである。正確にいうと、横断面が正円ではなくて、銘文のある箇所が本来の円よりも内側にある。すなわち銘文の箇所は図文のそれよりも、より多く削られているということである。Buchanan の目録には、この事実について何も触れていないが [1966: No. 417]、あえて推測を加えると、一つの可能性は、銘文を入れてもらったけれども誤字があり、文字の部分だけ彫り直してもらったかも知れない、ということである。印では字面の高低は許されないからである。あるいは古い印章をもらって銘文を自分のものに書き直してもらったのかも知れない。しかし、この円筒印章は使用による磨滅の跡がほとんど認められないことから判断すると、後者の可能性は非常に少ないと言わなければならない。

わずかな実測の結果から多くのことを考え過ぎたきらいがあるが、円筒印章を考古学的に実測して、その資料を蓄積してゆくならば、円筒印章からさらに多くのことが分るのではないかと思う。

5 円筒印章の考古学的研究の必要性

円筒印章の研究から、それぞれの時代における人間活動の何が分るのだろうか。円筒印章も多くの情報を持っているように見えるけれども、体系的に整理されたことがないので、どの特徴が何の解明に役立つのかも、不十分にしか分っていない。したがって、多くのカタログが習慣的に作製され、刊行されているだけである。円筒印章を考古学的に問題にする場合、どのような要素を抽出することが必要であるか、そのうち比較的研究されている要素とそうでないものを、ごく初歩的な試みであるけれども提示しておきたい。

まず円筒印章そのものから、(1)形態、(2)図文、(3)銘文、(4)材質を、製作技法の観点から(5)形態と(6)図文を加えて6要素が考えられる。形態の要素というのは、使用による変形も当然ふくまれている。そして(7)印泥、および(8)タブレットに押捺された印影も、使用の証拠として重要である。例えば円筒印章の機能を問題にするならば、その出土状態を加えて、大部分の要素が考慮されなければならない。

これらの8要素のうち、(2)図文ははじめに述べたように、円筒印章が注目されはじめてからずっと研究が続けられてきたものである。Frankfort [1939] と Moortgat [1940] の業績が一つの到達点であった。現在では P. Amiet がさらに詳細な研究への努力を続けている [1980]。(3)銘文は楔形文字の音訳と翻訳が、目録類で必ず掲載されている。またシカゴのシンポジウムにおける Gelb のような研究例があるけれども [1977]、銘文の性格にかんする一般的理解はまだえられていないようである。(4)材質も目録類には必ず記述される習慣になっているが、材質の同定に精粗があって、すべてを記述どおりに信用することはできない。材質でとくに重要なのは、例えばラピス・ラズリのように、アフガニスタン北部という遠隔地から運搬されてきたことの明らかなものの多寡は、交易関係の考察にも重要な資料となる。

形の製作(5)にかんする研究は最近注目されはじめたばかりで、L. Gorelick と A. John Gwinnett が主として穿孔法や図文の彫り方の検討を行なっている [GORELICK and GWINNET 1978, 1981; GWINNET and GORELICK 1979]。新しい装置や機械を使っただけの研究で、従来ほとんどかえりみられなかった要素に注目した点で重要であるが、その成果のかなりの部分は、ごく簡単なルーペによる観察でもえられるものであろう。(6)図文の彫刻はドリル技法などの特殊なものがかつて問題にされ [FRANKFORT 193:36]、最近では上に述べた Nissen の研究があり、Porada も普通の文様の刻み方を問題にしているが [1977]、成功しているとはいえない。

印泥(7)は、円筒印章の機能を知る上で最も重要な材料であるにもかかわらず、かなり遅れている部分である。発掘のさいに採集された印泥、あるいは博物館に収蔵されている印泥についてはかなり注目されているけれども、問題はむしろ発掘中にどのように処理されているかにある。ウルの発掘において Seal Impression Stratum から出土した印泥は、かなり丹念に採集されているように思われる [LEGRAIN 1936]。しかし、これらの印泥の大多数を占める幾何学様式の図文と同種の図文をもつ印章が発見されていないという問題がある。これも木製の円筒印章が使われた可能性が強い。(8)印影をもつタブレットは上述のシンポジウムでも問題にされているが、先にも触れたように、資料集

の記載が著しく不十分なため、研究はほとんど進展していないようである。

さて(1)形態はどうだろうか。形態は考古学的研究において最も基本的な要素であるにもかかわらず、従来の研究ではほとんど問題にされていない。遺物としての円筒印章に対して他の研究者よりも注意を払った Frankfort でさえも、名著 *Cylinder Seals* において、まとまった形では、はじめにわずか3ページをさいて大略を述べたにすぎない。ディヤラ地域出土の円筒印章についても、発掘報告であるにもかかわらず、サンプル的に挿図や図版に収められたほかは、すべて新印影だけ、したがって図文だけが示されているにすぎない。

既刊の目録類はほとんどすべて、大多数の円筒印章について新印影の写真とごく簡単な記述だけですましている。ただ一つ最近出版された Dominique Collon 博士による *Cylinder Seals II, Akkadian—Post-Akkadian — Ur III Periods, Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum*, 1982だけが、全部の円筒印章について、形の側面の写真を新印影とともに掲載して目録のスタイルを革新した。技術的に困難な点があるかも知れないけれども、円筒印章の上下両面についても写真を掲載してほしい。さらに穿孔法や磨滅の状況が分るような実測図を添えるならば、形態的特徴に基づく円筒印章の研究が進み、その性格の究明は大きく前進するものと期待される。

参考文献

AMIET, Pierre

1980 *La glyptique mésopotamienne archaïque*, (1st edition. 1961), Paris.

BUCHANAN, Briggs

1966 *Catalogue of Ancient Near Eastern Seals in the Ashmolean Museum*, Oxford.

1981 *Early Near Eastern Seals in the Yale Babylonian Collection*, New Haven.

COLLON, Dominique

1982 *Cylinder Seals II, Akkadian—Post-Akkadian— Ur III Periods, Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum*, London.

FRANKFORT, H.

1939 *Cylinder Seals*, London.

1955 *Stratified Cylinder Seals from the Diyala Region, Oriental Institute Publications*. Vol. 72, Chicago.

GELB, I. J.

- 1977 Typology of Mesopotamian Seal Inscriptions, in [GIBSON and BRIGGS 1977 : 107—126].
- GIBSON, McGuire and Robert D. BIGGS
 1977 *Seals and Sealing in the Ancient Near East, Bibliotheca Mesopotamica*, Vol. 6, Malibu.
- GORELICK, L. and A. John GWINNETT
 1978 Ancient Seals and Modern Science, Using the Scanning Electron Microscope as an Aid in the Study of Ancient Seals, *Expedition*, 20(2), 38—47.
 1981 Close Work without Magnifying Lenses? A Hypothetical Explanation for the Ability of Ancient Craftsman to Effect Minute Detail, *Expedition*, 23(2), 27—34.
- GWINNETT, A. John and Leonard GORELICK
 1979 Ancient Lapidary, A Study Using Scanning Electron Microscopy and Functional Analysis, *Expedition*, 22(1), 17—32.
- LE BRUN, Alain
 1971 Recherches stratigraphiques a l'acropole de Suse, 1969—1971, *Cahiers de la délégation archéologique française en Iran*, 1, 163—233.
- LEGRAIN, L.
 1936 *Archaic Seal Impressions, Ur Excavations*, Vol. III, Oxford.
- MOORTGAT, Anton
 1940 *Vorderasiatische Rollsiegel*, Berlin.
- NISSEN, Hans J.
 1977 Aspects of the Development of Early Cylinder Seals, in [GIBSON and BIGGS 1977 : 15—23].
- PORADA, Edith
 1977 Of Professional Seal Cutters and Nonprofessionally Made Seals, in [GIBSON and BIGGS 1977 : 7—14].
- STEINKELLER, Piotr
 1977 Seal Practice in the Ur III Period, in [GIBSON and BIGGS 1977 : 41—53].
- STROMMINGER, Eva
 1980 *Habuba Kabira : Eine Stadt vor 5000 Jahren*, Mainz am Rhein.
- von der OSTEN, H.H.
 1934 *Ancient Oriental Seals in the Collection of Mrs. Edward T. Newell, Oriental Institute Publications* Vol. 22.
- WISEMAN, D.J.

1962 *Cylinder Seals I, Uruk—Early Dynastic Periods, Catalogue of the Western Asiatic Seals in the British Museum*, London.